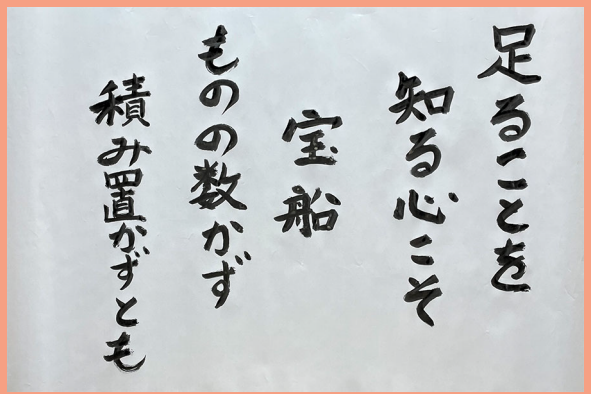
實相寺花園会報

令和四年
一月一日発行
発行所
臨済宗妙心寺派
陽明山　實相寺
實相寺花園会
〒761-0450
高松市三谷町
1811番地1
TEL087−889−3838
編集発行人
山本文匡
https://www.jissouji.net
第153号



お寺の掲示板

「知足の心が宝船というもの、金や物が不足であったとしても」（『道歌教訓和歌辞典』より）

仏典では「小欲知足（しょうよくちそく）」とも説かれますが、欲求が大きければいくら恵まれていても満足することは出来ません。ですから幸福とは金銀財宝を積んだ宝船を手に入れることではなく、足るを知る心を養うことであるという古くからの道歌です。

温暖化をはじめ、多くの社会問題を抱える私達が、今一度省みるべき教えではないでしょうか。

素だということになります。

例えば大変有難い仏像があったとしましょう。仏像自体には何の責任もありませんが、もし私がその有難い仏像を欲しいと思っても、手に入れることが出来なかった時、その仏像は私の苦しみの媒体となります。こうして考えると、この世の中の全ての存在は苦しみの媒体だということになります。

勿論、逆もあります。仏像が「喜び」や「幸福」の媒体になる場合もあるでしょう。だからこの世の中は楽しみに満ちている、と考える人には仏教は響かないでしょう。

しかし、往々にして人は生きていくことは苦しいということを、年齢と共に次第、次第に理解しますので、やはりお釈迦様が説かれたように、この世の中は本質的に「苦」なのであろうと考えます。

お正月の茶席

お正月ですが、今年は曜日の都合で元日と二日の二日間は書院の炉に炭を入れます。両日とも午前十時から午後三時迄にお参りの方には、住職がお抹茶を差し上げますので、是非お気軽にお立ち寄り下さい。また除夜の鐘は大晦日十一時半からです。

お釈迦さまの伝記・仏伝について⑨

さて四つの真理「苦・集・滅・道」から構成される「四聖諦」について、もう少し詳しく見ていきましょう。

「苦」とは我々が生きるこの世界は苦の上に成り立っているという真理で、その原因は私達の心の中に「渇愛」があるからというのが「集」でした。

ここが重要で「この世の全てが苦だ」といっても、私達の外側に客観的な「苦」が存在している訳ではありません。私達は「全ての存在を苦として捉えてしまう」ということで、その前提にあるのが「諸行無常」です。

全ての存在がいつまでも変わらぬ姿であれば、何も苦しむことはないのです。しかし「あらゆるものは崩壊していく」という原則の上に成り立っていくからこそ、それを捉える私達の心はそこに苦しみを生み出してしまうのです。その原因である「集」を消し去る方法があるという真理が「滅」であり、自分の力で自分の心の中を変えていく具体的な生き方が「道」です。「道」に従って自己変革が出来れば、私達は外界の変化を「苦」にしなくなるのです。

ここでもう一つ重要なのが「諸法無我」です。もしも私達の中に永遠不滅な魂のような「我」があるのだとすれば、肉体はただの容器にすぎません。歳をとったら車を乗り換えるように、次の肉体に乗り換えられるのであれば、別に苦にはならないでしょう。

しかしお釈迦様は、この世界を客観的に観察された結果、私達をはじめこの世の全ての存在は、様々な要素が因

縁により仮に集まっているのに過ぎないことを悟られました。それが「諸法無我」ということです。

私達は目や耳などの感覚器官を通じて外界の情報を受け取っていますが、仏教では五官に加えて心も外界の認識器官（六根）の一つであると考えます。そして私達の外には六根の認識対象である六種の世界（六境）があり、私達は六根から受けとった情報を元に外界を認識（六識）していると考えます。

この時、もしも私達の内側に確固たる「我」（外界と無関係に成り立つ存在）が有るのであれば、私が外界の情報を取捨選択して受け取ればいいだけの話です。しかしお釈迦様は「我」は無いと説かれました。

私達の中に「我」が無ければ、この世界には「認識器官（六根）が外界（六境）を捉え、それを私が認識（六識）している」という一つのネットワークシステムが存在しているだけということになりますが、そのシステムに中心となる核やセンターはありません。これが仏教の説く「無我」なのです。

結果として、私とは外側の世界（六境）とそれを繋ぐ認識器官（六根）と内側の認識（六識）を含むネットワーク全体を通して存在するものであり、外界の認識対象も今の私の構成要素になります。つまり無我であるが故に、世界の全てが私自身であり、私でないものは何一つ存在しないのです。

そうすると私の心が苦しみを感じている時には、その苦しみをもたらした外界の存在もまた、私の苦しみの一要